

認知症になっても輝けるまちへ ～いのち輝く折り鶴100万羽プロジェクト～

森 安美 ●ゆめ伴(とも)プロジェクト in 門真実行委員会 総合プロデューサー



折り鶴づくりで笑顔になる高齢者

1. 背景と目的

本活動の目的は、折り鶴を通じて認知症の人が主役となって活躍できる機会を創出することで、認知症になっても絶望ではなく希望を、孤立ではなくつながりを、あきらめではなく夢を持つことができる「認知症になってもいのち輝く社会」を全国に広げていくことである。

認知症になると、社会から孤立し夢や希望を失いやすい。「認知症になっても輝いていたい」という認知症の母親と暮らす娘の切実な声をきっかけに、私たちは認知症になっても社会の一員として役割を持ち、笑顔で輝けるまちの実現を目指して、認知症の人や家族、介護や福祉、行政職員や市民団体等が想い一つにつながって、認知症の人が輝ける場や活動の創出に取り組んでいる。

2. 取り組みの方法

具体的には認知症の人が主役となって活躍するスポーツイベント、畑やサロンなど多様な活動を実施している。コロナ禍では新たに「人と人が会えないなら折り鶴でつながろう」と折り鶴プロジェクトに取り組み、

施設や在宅の場にながら折り鶴で社会参加できる新たな「ステイホーム型地域活動」というスタイルを見出し、あらゆる状況の高齢者が社会参加できる活動へと発展させた。

さらに、2025年大阪・関西万博に向けて全国の認知症の人や高齢者が折り鶴を作る担い手となり、万博までに100万羽の折り鶴をつくり、万博会場に飾って世界からの来場者をお迎える「いのち輝く折り鶴100万羽プロジェクト」に取り組んでいる。

門真市では商業施設の協力を得て「いのち輝く折り鶴 JAPAN パビリオン」を創設し、15万羽の折り鶴を展示し、認知症の人や高齢者が折り鶴で交流できる居場所づくりを展開している。現在、大阪府、関西圏だけではなく宮城県や福島県浪江町、香川県などにも活動が広がっており、今後、折り鶴パビリオンを拠点に折り鶴とともに認知症の方々が活躍できる場や機会を、全国にさらに広げていきたいと考えている。

3. 期待される成果

認知症高齢者が折り紙1枚で社会参加ができ、そのプロセスの中で地域とのつながりおよび一体感、共に創り上げる達成感、誰かを笑顔にする貢献感を実感することができる。この実践により、認知症になっても社会貢献できる仕組みが生まれ、全国に展開することでその先に認知症になっても輝ける社会が実現できると考えている。